

日本プロレタリア文学集・9



日本プロレタリア文学集・9

黒島伝治集

日本プロレタリア文学集・9

黒島伝治集

定価 二六〇〇円

一九八四年九月二十五日 初版
一九八五年四月五日 第二刷

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三三〇一七一一
振替 東京 三一一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・9

黒島伝治集

目次

電報	七
隔離室	一五
二錢銅貨	二四
豚群	二六
砂糖泥棒	三七
彼等の一生	四二
雪のシベリア	五五
櫛	六六
渦巻ける鳥の群	八〇
穴	一〇三

汜 濫		一五
パルチザン・ウォルコフ		一四四
氷 河		一六二
捕虜の足		一八六
土鼠と落盤		一九三
砂 金		二四
海の第十一工場		二九
浮動する地価		三四三
お化け煙突		三〇
国 境		三六九
前 哨		三八一
傷病兵		三九一
岬		三九四
武装せる市街		三〇九

解説	小林茂夫	四九
発表年月日と掲載文献		四七

電 報

ひひひひ。」と、他の内儀達に皮肉られた。

二

おきのは、自分から、子供を受験にやったとは、一と言も喋らなかつた。併し、息子の出発した翌日、既に、道辻で出会った村の人々はみなそれを知っていた。

最初、

「まあ、えら者にしようと思つて学校へやるんじゃないやう。」と、他人から云われると、おきのは、肩身が広いやうな気がした。嬉しくもあつた。

「あんた、あれが行たんを他人に云うたん？」と、彼女は、昼飯の時に、源作に訊ねた。

「いいや。俺は何も云いやせんぜ。」と源作はむしむしした調子で答えた。

「そう。……けど、早や皆な知つて了うとら。」

「ふむ。」と、源作は考えこんだ。

源作は、十六歳で父親に死なれ、それ以後一本立ちで働きこみ、四段歩ばかりの畠と、二千元ほどの金とを作り出していた。彼は、五十歳になつていた。若い時分には、二三万円の金をためる意気込みで、喰い物も、ろくに食わず

一

源作の息子が市の中学校の入学試験を受けに行つてゐるという噂が、村中にひろまつた。源作は、村の貧しい、等級割一戸前も持つていない自作農だつた。地主や、醬油屋の坊っちゃん達なら、東京の大学へ入つても、当然で、何も珍らしいことはない。噂の種にもならないのだが、ドン百姓の源作が、息子を、市の学校へやると云うことが、村の人々の好奇心をそそつた。

源作の噂の、おきのは、隣家へ風呂を貰いに行つたり、念仏に参つたりすると、

「お前とこの、子供は、まあ、中学校へやるんじゃないかいな。銭が仰山あるせになんぼでも入れたらえいわいな。」

に働き通した。併し、彼は最善を尽して、ようよう二千円たまつたが、それ以上はどうしても積りそうになかった。

そしてもう彼は人生の下り坂をよほど過ぎて、精力も衰え働けなくなつて来たのを自ら感じていた。十六からこちらへの経験によると、彼が困難な労働をして僅かずつ金を積んで来ているのに、醬油屋や地主は、別に骨の折れる仕事もせず、沢山の金を儲けて立派な暮しを立てていた。また彼と同年だった、地主の三男は、別に学問の出来る男ではなかつたが、金のお蔭で学校へ行つて今では、金比羅さんの神主になり、うまうまと他人から金をまき上げている。彼と同年輩、または、彼より若い年頃の者で、学校へ行つ

ていた時分には、彼よりよほど出来が悪かつた者が、少しよい勉強をして、読み書きが達者になつたために、今では、醬油会社の支配人になり、醬油屋の番頭になり、または小学校の校長になつて、村でえらばつてゐる。そして、彼はそういう人々に対して、頭を下げねばならなかつた。彼はそういう人々の支配を受けねばならなかつた。そういう人々が村会議員になり勝手に戸数割をきめてゐるのだ。

百姓達は、今では、一年中働きながら、饑えなければならぬようになつた。畠の收穫物の売上げは安く、税金や、生活費はかさばつて、差引き、切れこむばかりだつた。そ

うかといつて、醬油屋の労働者になつても、仕事がいなくて、賃銀は少なかつた。が今更、百姓をやめて商売人に早變りをすることも出来なければ、醬油屋の番頭になる訳にも行かない。しかし息子を、自分がたどつて来たような不利な立場に陥入れるのは、彼れには忍びないことだつた。

二人の子供の中で、姉は、去年隣村へ嫁づけた。あとには弟が一人残つてゐるだけだ。幸い、中学へやるくらい金はあるから、市で傘屋をしてゐる従弟に世話をして貰つて、安くて通学させるつもりだつた。

「具合よく通つてくれりやえいがなあ。」と彼は茶碗を置いて云つた。

「そりや、通るわ。一年からずつと一番ばかりでぬけて来たんじゃもの。」と、おきのは原作の横広い頭を見て云つた。胡麻塩の頭髮は一ヵ月以上も手入れをしないので長く伸び乱れてゐた。

「いいや、それでも市に行きやえらい者が多いせにどうなるやら分らんで。」

「毎朝、私、観音様にお願を掛けよるんじやものきつと通るわ。」

原作は、それには答えなかつた。彼は、息子が中学を卒業して、高等工業へ入つて、出ると、工業試験場の技師に

なり、百二十円の月給を取るのを想像していた。

三

市の従弟から葉書が来た。息子は丈夫で元気が好いと書いてあった。県立中学は、志願者が非常に多いと云つて来た。市内の小学校を出た子供は、先生が六ヵ月前から、肝煎^{かんせん}つて受験準備を整えている上に、試験場でもあわてずに落ちついて知つて居るだけを書いて出すが、田舎から出て来た者は、そういう点で二三割損をする。もつとも、この子はよく出来るということだから、通ることは通るだろうが、と書いてあった。

「通つたらえらいものじゃがなあ。」源作は、葉書を嚙^{かか}に読んできかせた後、こう云つた。

「もつと熱心にお願をするわ。」

こういうことを、神仏に願つても、効くものでない、と常々から思っている源作も、今は、妻の言葉退ける気になれなかった。

源作が野良仕事に出ている留守に、おきのの叔父が来た。

「そちな、子供を中学校へやつたと云うじゃないかいや。」

一体、何にする積りどいや」と叔父は、磨りちびてつる

るした縁側に腰を下して、おきのに訊ねた。

「あれを今、学校をやめさして、働きに出しても、そんなに銭はとれず、そうすりゃ、あれの代になつても、また一生頭が上がりずに、貧乏たれで暮さにならんせに、今、ちいと物入れて学校へでもやつといてやったら、また何ぞになろうと思つていない。」と、おきのは答えた。

「ふむ。そりや、まあえいが、中学校を上つたつて、えらい者になれやせんぜ。」

「うちの源さん、まだ上へやる云いよらあ。」

「ふむ。」と、叔父は、暫らく頭を傾けていた。

「庄屋の旦那が、貧乏人が子供を市の学校へやるんをどえらい嫌うとるんじゃせにやつても内所^{ないしょ}にしとかにやならんぜ。」と、彼は、声を低めて、しかも力を入れて云つた。

「そうかいな。」

「誰れぞに問われたら、市へ奉公にやつたと云うとくがえいぜ。」

「はあ。」

「ようく、気をつけにやらんぜ……」と叔父は念をおした。そして、立つて豚小屋を見に行つた。

「この牝^めはずか肥えるじゃないかいや。」

親豚は、一ヵ月程前に売つて、仔豚のつがいだけ飼つて

いる。その牝の方を指して叔父はそう云った。

「はあ。」と、おきのは云つて、彼女も豚小屋の方へ行つた。

「豚を十匹ほど飼うたら、子供の学資くらい取られんこともないんじやがな、……何にせ、ここじや、貧乏人は上の学校へやれんことにしとるせに、奉公にやつたと云うとかにやいかんて。」と、叔父は繰り返した。

おきのは、叔父の注意に従つて、息子のことを訊ねられると、傘屋へ奉公に出したと云つた。併し、村の人々は、彼女の言葉を本当にしなかつた。でも、頑固に、「いいえいな、家に、市の学校へやったりするかいしうがあるもんかいな。食うや食わずじやのに、奉公に出したんにきまつたら。」と、彼女は云い張つた。

が、人々は却つて皮肉に、

「お前んとこにや、なんぼかこれが（と拇指と示指とで円るものをこしらえて）あるやら分らんのに、何で、一人息子を奉公やかいに出したりすらあ！ 学校へやつたんじやが、うまいこと嘘をつかあ、……まあ、お前んとこの子供はえらいせに、旦那さんにでもなるわいの、ひひひ……。」

おきのは、出会した人々から、嫌味を浴せかけられるの

がつらさに、

「もういつそ、やめさして、奉公にでも出すかいの。」と源作に云つたりした。

「奉公やかい。」と、源作は、一寸冷笑を浮べて、むしむしした調子で、「己等一代はもうすんだようなもんじやが、あれは、まだこれからじや。少々の銭を残してやるよりや、教育をつけてやつとく方が、どんだけ為めになるやら分らんせん。村の奴等が、どう云おうがかもうたこつちやない。庄屋の旦那に銭を出して貰うんじやなし、俺が、銭を出して、俺の子供を学校へやるのに、誰に気兼ねすることがあるかい。」

おきのは、叔父の話をきいたり、村の人々の皮肉をきいたりすると、息子を学校へやるのが良くないような気がするのだったが、源作の云うことをきくと、源作に十二分の理由があつて、簡単、明瞭で、他から文句を云う余地はないように思われた。

四

試験がすんで、帰るべき筈の日に、おきのは、停車場へ迎えに行つた。彼女は、それぞれ試験がすんで帰ってくる

坊っちゃん達を迎えに行っている庄屋の下婢^{げじよ}や、醬油屋の奥さんや、呉服屋の若旦那の眼につかぬように、停車場の外に立つて息子を待っていた。彼女は、自分の家の地位が低いために、そういう金持の間に伍することが出来ないように、自から、卑下していた。そして、また、実際に、穢^{けが}いドン百姓の噂と見下げられていた。

やがて、汽車が着くと、庄屋や、醬油屋や、呉服屋などの坊っちゃん達が降りて来た。

「お母あさん。」と、醬油屋の坊っちゃんは、プラットホームに降りると、すぐ母を見つけて、こう叫びながら、奥さんのいる方へ走りよった。片隅からそれを見ていたおきのは、息子から、こうなれなれしく、呼びかけられたら、どんなに嬉しいだろうと思った。

「坊っちゃんお帰り。」と庄屋の下婢は、いつもぼかんと口を開けている、少し馬鹿な庄屋の息子に、叮嚀^{ていねい}にお辞儀をして、信玄袋を受け取った。

おきのは、改札口を出て来る下車客を、一人一人注意してみたが、彼女の息子はいなかった。確かに、今、下車した坊っちゃん達と一緒に、試験がすんで帰って来る筈だった。村をたつて行った日は異^{ちが}っていたが、学校は同じだった。彼女は、乗り越したのではあるまいかと心配しながら、

なお立って、停車場の構内をじろじろ見廻した。

「僕、算術が二題出来なんだ。国語は満点じゃ。」醬油屋の坊っちゃんは、あどけない声で奥さんにこんなことを云いながら、村へ通じている県道を一番先に歩いた。それにづいて、下車客はそれぞれ自分の家へ帰りかけた。

「谷元は、皆な出来た云いよった。……」こういう坊っちゃんの声も聞えた。谷元というのは源作の姓である。

おきのは、走りよって、息子のことを、訊ねてみたかったが、醬油屋へ、良人^{おとこ}の源作が労働に行っていたのを思い出して、なお卑下して、思い止まった。

停車場には、駅員の外、誰れもいなかった。おきのは、悄悄^{しんせう}と、帰りがけた。彼女は、一番あとから、ぼつぼつ行っている呉服屋の坊っちゃんに、息子のことを訊ねようと考えた。坊っちゃんは、兄の若旦那と、何事か——多分試験のことだろう——話しあつて笑っていた。あの話がすんだら、近づいて訊ねよう、とおきのは心で考えた。うっかりして乗り越すようなあれじゃないが、……彼女は一方でこんなことも思った。

若旦那の方に向いて、しきりに話している坊っちゃんの顔に、彼女は注意を怠らなかつた。そして、話が一寸中断したのを見計らつて、急に近づいて、息子のことをきいた。

「谷元はまだ残つとると云いよった。」と、坊っちゃん、彼女に答えた。

「試験はもうすんだんでござんしような。」

「はあ、僕等と一緒にすんだんじゃが、谷元はまだほかを受ける云いよった。」

「そうでござんすか。どうも有りがとうさん。」と、おきのは頭を下げた。彼女は若旦那に顔を見られるのが妙に苦るしかった。

翌日の午後、従弟から葉書が来た。県立中学に多分合格しているだろうが、若し駄目だったら、私立中学の入学試験を受けるために、成績が分るまで子供は帰らせずに、引きとめている。ということだった。

「もう通らなんだら、私立を受けさしてまで中学へやらいでもえいわやの。家のような貧乏なれに市の学校へやって、また上から目角に取られて等級でもあげられたら困らやの。」と、おきのは源作に云った。

源作は黙っていた。彼も、私立中学へやるのだったら、あまり気がすまなかつた。

五

村役場から、税金の取り立てが来ていたが、丁度二十八日が日曜だったので、二十九日に、源作は、銀行から預金を出して役場へ持つて行つた。もう昨日か、一昨日かに村の大部分が納めてしまつたらしく、他に誰れも行つていなかった。収入役は、金高を読み上げて、二人の書記に算盤をおかしていた。源作は、算盤がひと仕切りすむまで待っていた。

「おい、源作！」

ふと、囁れた、太い、力のある声でした。聞き覚えのある声だった。それは、助役の傍に來て腰掛けてゐる小川という村会議員が云つたのだ。

「はあ」と、源作は、小川に気がつくと言へた。小川は、自分が村で押しが利く地位にいるのを利用して、貧乏人や、自分の氣に食わぬ者を困らして喜んでゐる男であつた。源作は、頼母子講を取つた、抵当に、一段二畝の畑を書き込んで、其の監査を頼みに、小川のところへ行つた時、小川に、抵当が不十分だと云つて頑固にはねつけられたことがあつた。それ以來、彼は小川を恐れていた。

「源作、一寸、こっちへ来んか。」

源作は、呼ばれるままに、恐る恐る小川の方へ行つた。

「源作、お前は今度息子を中学へやつたと云うな。」肥つ

た、眼に角のある、村会議員は太い声で云った。

「はあ、やってみました。」

「わしは、お前に、たつてやんなどは云わんが、労働者^{はたらきもの}が、息子を中学へやるんは良くないぞ。人間は中学やかいへ行っちゃ生意気になるだけで、働かず、理屈ばかりこねて、却つて村のために悪い。何んせ、働かずにお前が理屈をこねる人間が一番いかん。それに、お前、お前はまたこの村で一戸前も持つとらず、一人前の税金も納めとらんのだ。子供を学校へやつて生意気にするよりや、税金を一人前納めるのが肝心じゃ。その方が国のためじゃ。」と小川は、ゆつくり言葉を切つて、じろりと源作を見た。

源作は、びくびく唇を顫わした。何か云おうとしたが、小川にこう云われると、彼が前々から考えていた、自分の金で自分の子供を学校へやるのに、他に容喙^{ようかい}されることはないという理由などは全く根拠がないように思われた。

「税金を持つて来たんか。」

「はあ、さようで……」

「それそうじゃ。税金を期日までに納めんような者が、お前、息子を中学校へやるとは以ての外じゃ。子供を中学やかいへやるのは国の務めも、村の務めもちゃんと、一人前

にすましてからやるもんじゃ。——まあ、そりや、お前の勝手じゃが、兎に角今年から、お前に一戸前持たすせに、そのつもりで居れ。」

小川は、なお、一時、いかつい眼つきで源作を見つめ、それから怒っているようにふいと助役の方へ向き直つた。収入役や書記は、算盤^{そろばん}をやめて源作の方を見ていた。源作は感覚を失つたような気がした。

彼は、税金を渡すと、すぐすぐ役場から出て歸つた。

昼飯の時、

「今日は頭でも痛いんかいの。」と、おきのは彼の憂鬱に硬ばっている顔色を見て訊ねた。彼は黙つて何とも答へなかつた。

飯がすんで、二人づれで畠へ行つてから、おきのは、

「家のような貧乏たれに、市の学校やかいへやるせに、村中大評判じゃ。始めつからやらなんだらよかつたのに。」と源作に云つた。

源作は何事か考えていた。

「もう県立へ通らなんだら、私立へはやるまいな。早よ呼び戻したらえいわ。」

「うむ。」

「分に過ぎるせに、通つとつても、やらん方がえいじゃけ

れど……」とおきのは独言^{ひとりごと}った。

暫らくして、

「そんなら、呼び戻そうか。」と源作は云った。

「そうすりゃいいわ。」おきのはすぐ同意した。

源作は島仕事を途中でやめて、郵便局へ電報を打ちに行つた。

「チヂビヨウキスグカエレ」

いきなりこう書いて出した。

帰りには、彼は、何か重荷を下したようで胸がすつとした。

息子は、びっくりして十一時の夜汽車であわてて帰つて来た。

三日たって、県立中学に合格したという通知が来たが、入学させなかった。

息子は、今、醬油屋の小僧にやられている。

——一九二三・三——